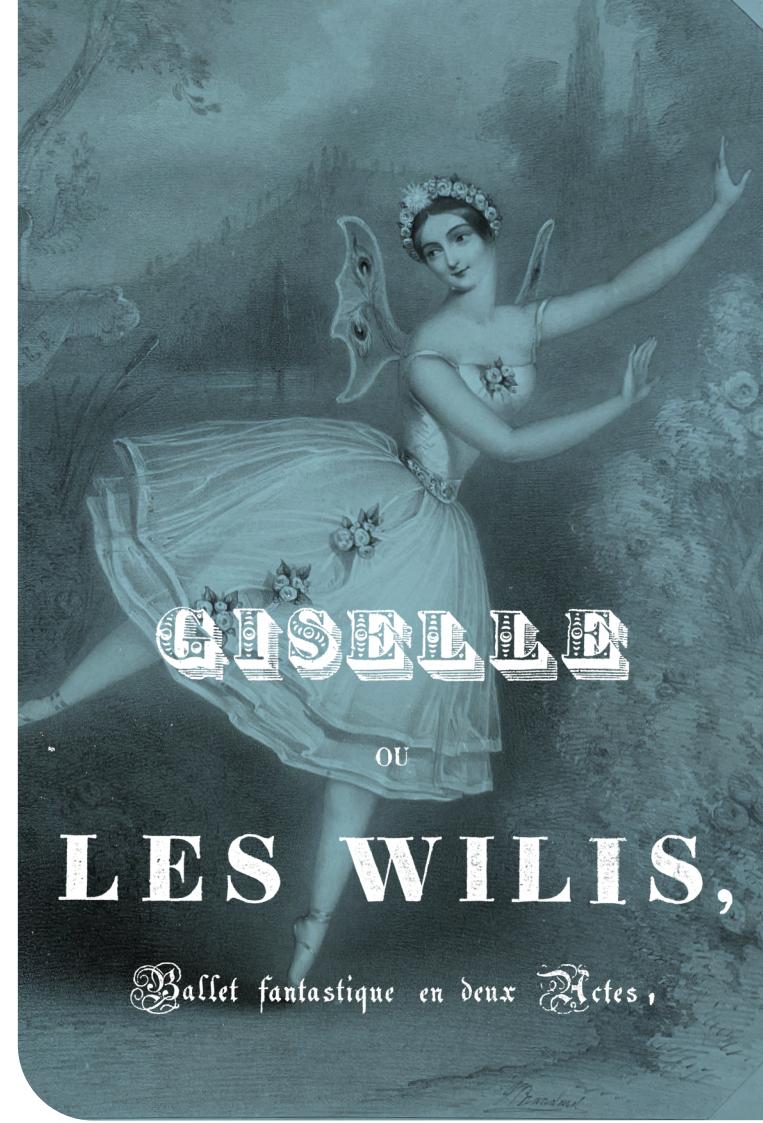


主な出展リスト

- ◆ 初演台本／『ジゼル』、あるいはウリたち／フランス／1841年(LT-35)
- ◆ 初演台本の翻訳／ヴェルノイ・ド・サン=ジョルジュ、テオフィル・ゴーチエ(訳:薄井憲二)／『ジゼルまたはウリたち』／井上バレエ団／1983年(BK-1109-pie)
- ◆ 書籍、テオフィル・ゴーティエ他／『オペラの美』／フランス／1845年(BK-0716-19c)
- ◆ 楽譜／アドルフ・アダン作曲／オーギュスト・リショーム作詞／『ラ・ウリ』幻想的なバラード:カルロッタ・グリッヘ／フランス／1840年代(SC-21)
- ◆ アンティークプリント／『ジゼル』を踊るカルロッタ・グリジ／イギリス／1840年代(AP-215)
- ◆ アンティークプリント／『ジゼル』を踊るカルロッタ・グリジ／1841年(AP-013)
- ◆ アンティークプリント／『ジゼル』を踊るカルロッタ・グリジ／フランス／1846年(AP-197)
- ◆ アンティークプリント／『ボルカ』を踊るカルロッタ・グリジとジュール・ベロー／イギリス／1845年頃(AP-091)
- ◆ 写真(サイン入り)／『ジゼル』を踊るアンナ・パヴロワ／ロシア／1908年(PH-D-195-10ws)
- ◆ 切り抜き／『ジゼル』を踊るタマラ・カルサヴィナとワラフ・ニシスキー／イギリス／1911年(CL-143)
- ◆ 葉書／『ジゼル』を踊るガリーナ・ウラノワ／ロシア／1946年(PC-AC-05)
- ◆ 葉書／『ジゼル』の「アルブレヒト」を踊るコンスタンチン・セルゲイエフ／1946年(PC-AC-04)

主な参考文献

- ◆ 薄井憲二／「『ジゼル』／井上博文によるバレエ劇場第30回公演プログラム／1980年7月／東京文化会館大ホール
- ◆ 薄井憲二／「『ジゼル』とその背景」／新国立劇場バレエ団2005-2006シーズン公演プログラム／2006年6-7月／新国立劇場オペラ劇場)
- ◆ 薄井憲二／「お祝い」／法村友井バレエ団創立80周年公演プログラム／2017年6月／あましんアルカイックホール
- ◆ 蘭原英了、薄井憲二／「バレエ」／『大百科事典』第12巻146-150頁／平凡社／1985年
- ◆ 薄井憲二／「クリジ」／『大百科事典』第4巻912頁／平凡社／1985年
- ◆ 薄井憲二／「ペロー」／『大百科事典』第13巻651頁／平凡社／1985年
- ◆ 薄井憲二／「ロマンティック・バレエ」／『大百科事典』第15巻1247頁／平凡社／1985年
- ◆ 薄井憲二／「バレエ・リュッス」／『大百科事典』第12巻150-151頁／平凡社／1985年
- ◆ 薄井憲二／「バレエ一夜」／新書館／1993年
- ◆ 薄井憲二／「バレエ:誕生から現代までの歴史」／音楽之友社／1999年
- ◆ ウェルノイド・サン=ジョルジュ、テオフィル・ゴーチエ(訳:薄井憲二)／『ジゼルまたはウリたち』／井上バレエ団／1983年
- ◆ セルゲイ・グリゴリエフ(監訳:薄井憲二)／『ディアギレフ・バレエ年代記1909-1929』／平凡社／2014年
- ◆ 薄井憲二、ロバート・ベル(監修)／『魅惑のコスチューム:バレエ・リュス展』／国立新美術館／2014年
- ◆ シリル・ウイリアム・ボーモント(訳:佐藤和哉)／『ジゼルという名のバレエ』／新書館／1992年
- ◆ 鈴木晶(編著)／『ジゼル:初演から現代まで』／せりか書房／2024年



Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二 バレエ・コレクション
2026企画展

Kenji Usui Ballet Collection

“Giselle”

185th Anniversary

～Guided by the Writings of Kenji Usui～

2026/1/27(Tue.)～2026/3/8(Sun.)

(休館日はwebでご確認ください)

◎企画・監修

関典子(せき・のりこ) 薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター

Noriko Seki (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

舞踊家・振付家・舞踊研究家。幼少よりバレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。

お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授。日本ダンス評論賞、兵庫県芸術奨励賞、神戸市文化奨励賞、お茶の水女子大学賞小泉郁子賞など受賞。

アシスタント:若林絵美(Emi Wakabayashi) 後藤俊星(Shunsei Goto)

『ジゼル』初演185周年

～薄井憲二の著述を道標に～

2026/1/27(Tue.)～2026/3/8(Sun.)

(休館日はwebでご確認ください)

2026年は、不朽の名作バレエ『ジゼル』の初演から185周年です。
これを記念し、本展では『ジゼル』にまつわる資料をご紹介いたします。

道標となるのは、当コレクションの収集者である薄井憲二氏(1924-2017)の著述の数々。ダンサー、振付家、舞踊評論家、舞踊史研究家、コレクターとして幅広く活動された薄井氏の著述は、どれも鮮やかな臨場感にあふれていますが、それは、広範な資料を涉獵され、数多の舞台を鑑賞され、そしてダンサーとして、自ら踊られた体験と知識に裏打ちされた言葉だからでしょう。

さあ、薄井氏の目と言葉に導かれるように、『ジゼル』の世界をご堪能ください。(※薄井氏の著述は原文のまま記載し、補足を[]で加筆いたします。)

薄井憲二の
著述 1980年 井上博文によるバレエ劇場
第30回公演プログラム

『ジゼル』は原題を『ジゼルまたはウィリたち』といい、1841年6月28日パリのオペラ座で初演された。初演からすでに百数十年経過しているわけで、現在残っている世界最古のバレエといつてよい。[中略]

ではなぜ『ジゼル』だけが数多くのロマンティック・バレエの中から生き残ったのか？それは多少は偶然、大部分は優れた構成、演出、音楽の故であろう。たった2幕の短い作品の中に、舞姫にとってこれほどどころの多いバレエはほかにはない。始めから芝居も踊りもたっぷりあり、あとでは妖精となって軽やかに舞い、愛の力で恋人をまもる。バレーナにとってこれほど好ましい役はない。



第1幕 村娘のジゼルを演じるカルロッタ・グリジ（1841年）



第2幕 ウィリとなって自身の墓の上を飛翔するジゼルを演じるカルロッタ・グリジ（1841年）

『ジゼル』(Giselle)
全2幕のロマンティック・バレエ

[初演] 1841年6月28日 パリ・オペラ座

[振付] ジャン・コラール、ジュール・ペロー

[台本] ヴェルノワ・ド・サン=ジョルジュ、テオフィル・ゴーティエ、ジャン・コラール

[音楽] アドルフ・アダン

[主演] カルロッタ・グリジ(ジゼル)、リュシアン・プティバ(アルブレヒト)

第1幕の舞台はドイツの美しい渓谷。無垢な村娘ジゼルと青年アルブレヒトは恋仲にあるが、実は彼は貴族であり大公の娘バチルドと婚約している。秘かにジゼルに思いを寄せる森番ヒラリオンは嫉妬にかられ、この不実な貴族アルブレヒトの正体を暴く。心臓が弱いジゼルは錯乱し、母の腕の中で息絶える。

第2幕の舞台は夜の森。墓から蘇ったジゼルは、ウィリ(未婚のまま死んだ娘たちの精霊)の仲間に迎え入れられる。復讐心に満ちたウィリは男たちを捕らえて死ぬまで踊らせるという伝説の通り、ヒラリオンは沼に突き落とされ死すが、アルブレヒトは、死してなお彼を愛し続けるジゼルに守られ、同じ運命を免れる。朝、空が白んぐると、ジゼルを含むウィリたちは消え去り、残されたアルブレヒトは悲嘆にくれる。

神秘の感覚、超自然的なものの喚起、不滅の愛の表明、肉体と靈といふ二元論の探求によって、『ジゼル』はロマンティック・バレエの真髄といえよう。



楽譜「ラ・ウィリ：幻想的なバラード：カルロッタ・グリジへ」（1840年代）

19世紀、『ジゼル』を生んだ2人
—グリジとペロー—



『ポルカ』を踊るカルロッタ・グリジとジュール・ペロー（1845年頃）

薄井憲二の
著述 1999年『バレエ：誕生から
現代までの歴史』音楽之友社 75頁

【カルロッタ・グリジ(1819-1899)は】14歳のときに興行先の人物に誘われて全イタリアを回る巡業に出かけた。そしてナボリに来たときに【マリー】タリオーニ(1804-1884)の相手役だったジュール・ペロー(1810-1892)に出会う。ペローはひと目でグリジの才能を見抜いた。女性としても強く惹かれ、自分の人生はグリジを鍛え、世に出すことになると固く心に誓った。

薄井憲二の
著述 1993年『バレエ千一夜』
新書館 27頁

【ジュール・】ペローはパリでテクニシャンとして鳴らした踊り手だが、相手役のマリー・タッリオーニ【原文ママ】に嫌われ、オペラ座を辞してナボリに来ていた。ペローはひと目でカルロッタの才能を見抜いた。未来の大バレリーナの姿を予見したのである。

すぐさま厳格な訓練が始まった。当時の稽古は現在と違い、足を開くための機械にしばりつけられたり、リンパリングのような柔軟運動を長時間行うというものであったが、カルロッタは喜んでそれに耐えた。

「うつぶせに寝て、ジュールに腰の上に立ってもらうこともあります。腰を鍛えるためです。熱烈な抱擁のようでした」、カルロッタは語っている。2人は既に内縁関係にあった。

薄井憲二の
著述 1993年『バレエ千一夜』
新書館 30頁

【『ジゼル』の】初演の日が決った。1841年6月28日である。グリジの21歳の誕生日に合せて決められたらしい。いよいよ本物のオペラ座デビューである。[中略]周知の通り『ジゼル』とグリジは、歴史に残る成功を収めた。オペラ座は喝采でどよめいた。

20世紀、『ジゼル』の復活
—カルサヴィナとニジンスキーとパヴロワ

薄井憲二の
著述 1993年『バレエ千一夜』
新書館 24-25頁

【1910年、セルゲイ・ディアギレフ(1872-1929)率いるバレエ・リュスの第2回パリ公演(オペラ座)について】バレエ史の上ではこのとき【タマーラ】カルサヴィナ(1885-1978)の踊った作品として『火の鳥』『カルナヴァル』を挙げるが、じつはもっと重要な作品がひとつあった。『ジゼル』である。『ジゼル』はフランス・バレエだが、フランスではもう50年近くも上演されていない。ディアギレフ・バレエがこれをパリに持ってきたおかげで、このロマンティック期の名作はヨーロッパで息を吹き返したと言えなくもない。[中略]



左：バレエ・リュス版『ジゼル』（1910年）
タマーラ・カルサヴィナとワツラフ・ニジンスキー

右：『ジゼル』を踊るアンナ・パヴロワ（1908年）

タマーラのジゼルの相手役は【ワツラフ】ニジンスキー(1889-1950)で、稽古のときは息が合わず苦労したが、成功ではあった。「【アンナ】パヴロワ(1881-1931)を凌駕するかと思われた」とも「拍手はいつ止むともしなかった」とも書かれた。高名な批評家【フレリアン】スヴェトラロフ(1860-1935)は、「パヴロワとは違い、深く悲劇を追求するという解釈ではなかった。反対にそれは女性の嘆きの叙情歌で、悲しく詩的である。悲哀はなごやかで抑えられている……」。ウィリの場面では、カルサヴィナの踊りにはなぐさめるようなところが見られる。静かな満足、運命への服従、もっと幸せな未来への期待が、全体を通じて感じられるのである」と書いている。

薄井憲二の
著述 2006年 新国立劇場バレエ団
2005-2006シーズン公演プログラム

こうして『ジゼル』は、幾多の改変は経たけれども、殆ど唯一のロマンティック・バレエ期の作品として現代に伝承され、時代の香気を伝えているのである。